

学校英語と実用英語

平松 良行

【抄録】 悪評の高い受験英語が、実際には生徒の英語学習の大きな原動力になっており、また実効を伴わないと、単なる学問的動機だけでは学習に効果があがらない現状を考えれば、この受験英語を大いに利用して、成果をあげることが大切である。

【キーワード】 実用英語、英語会話、英文法、入試

1. はじめに

平成6年度より実施される指導要領では、オーラルコミュニケーションが必修となり、「実用的な英語」の習得に向けて歩み出したことになるが、はたしてうまくいくのであろうか。指導要領の改訂よりはむしろ我々を取り巻く環境・条件の影響の方がはるかに大きいと思われる。

さて、多くの座学のなかで、英語だけがその「実用性」を要求されているようであるが、これはどうか。実用という点で考えれば、高等学校でやる数学や、漢文などまったく役に立たないものであり、後者などは「本物」の中国語をやったほうがマシという議論も以前からなされているが一向にかわろうとしない。やはり教育には知的な格闘競技的な要素もあっていいはずであるからであろう。

公立普通高校では、とくに英語は大学受験の必須科目となっていて、これをやらなければ「もう大学進学はあきらめなさい」というに等しいものになってしまっているのも事実である。よく、「大学入試に英語があるから『正常』な英語の授業がなされないのであって、入試からはずせば、良い方向に向かう」という意見もあるが、はたして本当であろうか。理科・社会で生徒が受験科目としてとらなくなった科目の現状を考えるとどうも素直には従えない。

では、本校のように、それほど学力は高くないが、大多数の生徒が大学あるいは短大へ進学を希望している学校ではどのように対処すべきであろうか。まさか「本校の英語は受験とは関係ない、本当の英語教育をめざしている」などといっても、それは机上の空論となってしまう、ひいては生徒及び保護者の信頼を失ってしまうことになりかねない。

明治以来、英語は外国の知識・技術を吸収するという「目的」のために学習がなされたのであり、そこには強い動機があったはずである。またそういった目的

があったからこそ、皆一生懸命に取り組んだのであった。今の高校生も「入試」という強い動機があればこそ、真剣に取り組んでいけるのではないのだろうか。

以下、入試と英語の学習について現場の教員としての率直な意見を述べてみたい。

2. 大学入試は実用英語から程遠いものなのか

最近の入試問題はそれこそ千差万別で、いろいろな形式のものがある、受験の当事者でなければ、非常な興味関心をもってながめられることであろう。ただいえることは和訳一辺倒のものは少数の例外を除いて影をひそめてきたことであろう。まだまだ文法のための文法問題、穴埋め方式や選択肢方式で「本当」の学力が測れないほど不十分な点もあるが、「客観的に学力を測定しなければならない」点を考慮すると、それほど的外れのものでもないようである。批判する人たちは代案を作らなければならないが、いろいろな情勢をみると、それほど良いものが出てくるとは考えられない。

ただ、批判ばかりしていてもいけないのであって、こうした入試を積極的に利用すれば、効果があがるのはたしかである。とくに、千野栄一氏がその著「外国語上達法」(岩波新書)のある箇所で、『. . . どうしてもその言語をモノにしたいという衝動力を使い、そのエネルギーの燃えつきる前に千語を突破することである。従って、この千語習得の時間は短くしなければならず、そこで十分に時間のとれるときに新しい言語を学びはじめるように計画をセットする必要がある。』(下線部筆者)という内容を、いささか強引に解釈すれば、まさに入試はほぼ1年間という短い時間に必死になって取り組むので、理想的な環境になっている。

地元の短大にみられるように、実戦的と言うよりはむしろ、高校の授業を真面目にうけた生徒が栄冠を得られるようにした、細かい知識を問うものも確かに多いが、入試全体を見渡せば、listeningあるいはそれに

工夫をこらしてペーパーテスト形式にしているものや、比較的易しい長文で内容を問うものなど、多彩をきわめ、全てのことに対応しようとするれば英語のあらゆる知識が要求されるのであって、これらをこなせば「英語検定」、「国連検定」さらには TOEFL にもつながる知識が吸収できるものと思われる。

3. 英会話と英語の授業

これが現在の英語の問題点であろう。英語会話の得意な先生がひとりでしゃべり（時には生徒をそっこのけにして AET としゃべり、生徒はそれを『見て』いるだけ）さらには、生徒に話させようとしても 40 名もいるのでとても全員に英語の発話を求めるのは困難な状況にある。本校のようにやや融通がきくシステムになっていると、AET とのチームティーチングではクラスを 2 つに分けて、少人数で授業をすることが可能になっている。しかし、現在の段階では中学の授業に限られ、まだ高校にまでは導入されていない。今後コミュニケーション A、B が必修になれば人員の増強も含めて実施可能な方向に向かう環境の整備を期待したいものである。

また、英語の達人といわれている先生方の多くがご自分たちの学生時代に学校での授業によく取り組まれリーダーの教科書を何度も繰り返し読まれていたことにも注目すべきである。文法にしても「最低限の英文法はマスターしておかなければいけない」とも言われていて、決して文法などやらなくてもいいというのではない。

さらに、「外国の人たちは英語会話がうまく、日本人は下手である」といわれるが、はたしてそうであろうか。私の知人で一時オーストラリアへ短期留学をしていて、東洋系の人たちが集まってくる語学専門学校に在籍していた人が言っていたが、発展途上国の人たちは度胸はあるのでよく話すのであるが、ほとんど進歩が見られないそうである。彼らの英語には基礎的な知識が足りないので、積み上げることができないからであろう。また、海外の人たちと文通をする場合には日本の生徒はしっかりした文字で書いてくれる。日本の教育のよい面も積極的に評価をしていかなければいけないと思う。

さて、本題にもどって、英会話と授業の関係であるが、いわゆる一流校といわれる学校においては、単なる英文の繰り返しでは生徒が退屈してしまうので、知的水準の高いものが要求されてくる。和訳した段階においても十分に知的欲求を満たすものでなければならない。ただ、そうするとコミュニケーション C のようなディベートにいくべきだ、という説もあるが、南山大学の岡部先生もいっしょにしているように、一般

の学校では、ふつう国語や社会の授業において日本語でもそのようなことがなされていないのだから、いきなり英語の時間にやれといわれてもできるわけがない、ことも確かである。

授業で実用性を追求しても、生徒は日常生活において英語を使用する機会はほぼ皆無といっているはずである。本校では昨年度より中学 3 年生を中心に英語検定 (STEP) を、なるべく数多くの生徒に受けさせるようにしてその動機づけを図っているが、まだ十分な状況にあるとはいえない。準会場にしてあるので、3、4 級の受験者は増加しているが、高校生を対象とした 2 級の受験者が少ないのが残念である。

4. 他教科との関係

現在は英語も「英文学」的な匂いのするものから、外国語系あるいは国際科方面にその関心が移行しつつある。教科書もそれにともない文学的な臭いが消えつつある。英語＝英文学という図式は速やかに解消されなければならない。なぜかといえば、英語を学習する生徒のなかには、理科系へ進む者もあれば、社会科学系へ進む者もあるし、いろいろなパターンの英文を提供しなければいけないのである。英語の教師はえてして理科系的なものが苦手であり関心が薄いのであるが、生徒のニーズに応ずるべく努力をすべきである。

国際理解の観点からいけば世界史や政治経済とのリンクが、また自国の文化を十分理解しなければ、つまり、自分自身のアイデンティティが確立されなければ、国際人とはいえないので、その点からは国語、日本史とのリンクも大切になってくるし、その他いろいろな教科の総合的知識のうえに立った英語学習にしなければいけない。——この点、最近の入試問題は良くなっている。単なる英語の知識だけでなく幅広い教養が要求されてくるからである。

5. 大学と英語

現在の高校で行われている英語教育を抜本的に変えるには、要するに大学から変わっていくことが必要であろう。入試のやり方が変われば、それに合わせて高校での（さらには、予備校、塾での）やり方も変わってくるはずである。東大の入試改革にあるように、多くの大学の入試で listening を導入すれば、高校の方でもそれに対応した授業がなされるのである。

さらに教養課程での英語についても、現在いろいろな大学で創意工夫をこらしてみえるようで、地元の K 大では教養課程の外国語に英語会話を導入し、先生の方も現状に合わせた授業を目指して工夫をこらしている。ところが、一方では或る短大においては商業・経済系であるにもかかわらず、「聖書に関する物語」の

英語をやっている。これでは学生のヤル気が無くなるのも当然であろう。理想を言えば、理科系ではその分野の英語を教えるべきであろう。いくら教養課程といっても時間潰しに学生の全く関心がない内容のものをやっていたのでは、教師の趣味の押しつけ以外の何者でもない。現代のニーズにあったものや、学科の要求に答えるものであるべきである。

また、週あたりの実施回数も少なく、それでは高校で学んだ英語力が落ちるのがあたりまえであろう。よく辞書の重要語の表示で各単語のランクが示されているが、たとえば、旺文社「SHORTER 英和辞典」を見ると、その【見出し語】の説明のところで、

最重要語 (中学程度)	約1,000語
次位重要語 (高校程度)	約3,400語
3位重要語 (大学教養程度)	約5,600語

となっているが、実態はどんどん語彙が減っていき、英語力もそれに伴って落ちている。このようなことはほとんどの大学生が異口同音に言っていることであり改善の余地が大いにあると思われる。あまり専門とは関係ないような教養科目はどんどん廃止して、多くの時間を語学に割くか、それともいっそ希望者だけがやるシステムにしてもいいのではないだろうか。

6. 学力がつく入試勉強

英語関係の学部以外へ進学した生徒以外は、わずかの例外を除いて、英語力がガタ落ちしているのも、世間周知の事実である。そして高校時代に蓄えた英語力を突き崩しながらキャンパスライフを送っているのである。

つまり、現在の青年たちが英語の力をつけるのは、少なくとも、現在の状況においては、高校時代、それも、飛躍的についてくるのは2年生後半から3年生にかけてであろう。もちろん英語を学問としてとられ

ば、学習をするに際していろいろなケースが考えられるが、実用的な「道具」としてとらえた場合は、その習得に高校時代の受験学習においては、他に絶好の機会は見いだせないと思う。

大学に入学してから、英語以外の語学を専攻する人がいるが、その殆どはモノにできないでいる。留学でもすれば別であるが、大学での授業を聞いているだけではまず、高校で学んだ英語のレベルに達するのは至難の業であろう。

とにかく必死でやる場を提供してくれるのが大学入試なのであるから、この入試の形態をより良いものにするれば、英語学習も成果があがるはずである。

7. 最後に

目的があったほうが学習は効果があがるのは当然のことである。古代人が philosophy (love knowledge) として知識を愛したごとく「学問のための学問」をやることも大切なことであるが、一般の人々を対象にした場合は、すぐに実効が現れなければどうしてもインパクトが弱くなり効果が薄れてしまう。「実用英語」といっても各人各様でその受け取り方はちがってくる。もちろん共通項の部分のほうが多いのであるが、それでも学生諸君は限られた時間内に多くのことを学ばなければならないので少しでもムダなことはやるべきではない。会話英語=実用英語とはいいがたいし、6年間英語をやっても英会話一つできないでもマズいし、これからの学校での英語は大変になると思われる。ただ、外部からの要求にいちいち答えられるようなものにしたら何時間あっても足りないし、またその必要もないであろう。

学校での英語は、それをやっておけば、応用がきき少し訓練すれば、大抵のことには対応できる学力をつけることが「実用英語」の力がついたものとすべきであろう。